

時間と可能態 提題要旨

東洋大学 松浦和也

哲学史上、はじめて明快に時間について扱った考察はアリストテレス『自然学』第4巻第10～14章の時間論である。ただし、この比較的短い議論によって過去と未来（および過去性と未来性）、現在と永遠性、様相、時間の流れ、といった時間特有の事柄は、少なくとも積極的に論じられていないように思われる。本提題の目的は、アリストテレスの「今」に着目することによって、これら時間特有の事柄に関する彼の見解をあぶりだすことにある。本提題の中核的問いは、現在は可能的に存在するのか、現実的に存在するのか、それともそもそも存在しないのか、というものである。この問いへの応答に際して、本提題は『自然学』第4巻第13章に見られる「現在は過去と未来を可能的に分割する」の解釈を主軸とする。その解釈から、空間的な意味で現在は時間の中に存在するものではないことが確認され、さらに彼の時間の見方は単純に空間化されたものとは見なしえないことが導出される。